

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.07)

「不正な手段で得た富は、人を富ませず」

・・・悪銭身につかず・・・

先回の滞在のとき、以下の内容に類似した報告と同様なものを2回書いた。いずれも書いている途中で、あまりにも境遇の違いに愕然とし、テキーラを痛飲し不貞寝してしまった。今回はそのテツを踏まないように、しっかりと目を据えて報告することにした？

米経済誌「Forbes」は11日、世界の億万長者番付を発表した。2009年の番付では、世界的な金融危機の影響により、多くの億万長者の推定資産額が減少し、昨年2位だったメキシコのカルロス・スリム氏とその一族は、昨年から250億ドル減少の350億ドル(約3兆4300億円)で3位に後退した。それでも額の大きさに驚愕してしまう。(右図)

恰幅の良いスリム氏は、メキシコ電話会社のオーナーのうえ、そのほか幾つもの会社の大株主である。実は、私が働いている勤務場所のすぐ近くの、白亜の大きな立派なビル群が、このメキシコ電話会社のビルで、それこそ雲の上の人という感じであたりを睥睨している。

当会社は、私がかつて録を食んだ、日本の最大手の総合電気通信会社N社と同じように、固定電話はほぼ独占状態で、彼の傘下にある別の電話会社とともに、中南米各地の電気通信会社の買収や、資本投下を積極的に進めている。

この中には、私が過去に電気通信専門家として従事した国の、電話会社も何社含まれている。彼の地で技術協力に従事したことが、結果的に、後世の彼の資産形成の何億分、何兆分の一かは分かりはしないが、間接的に寄与したのではないかと？いらぬ想像が沸き起こり、時代の流れを感じるとともに、いささか複雑な感情が胸の内に内在する。



前方のビルは私が働いているビル、後方が電話会社のビル、周辺には多くの露天商が立ち並んでいる

雑な感情が胸の内に内在する。

日本一の資産家でも足元にも及ばない、電話の生業を主とする世界でも有数の富豪のいる国に、その富豪とほぼ同じ年齢の、日本から来た元電話屋の一介の老人が、資料の入った重いカバンを掲げ、通勤電車にもまれ、行き帰りに物乞いの何人かに遭遇しながら、メキシコを発展を願ってボランティア活動を実施している。

勤務先の古びた雑居ビルの隣りに、対極ともいえる堂々と聳え立つ白亜のビルに、彼がそこに座しているかと思うと、「この現実は何であろうか？」との、不条理さに、時には涙の一つも流れようというものである。

今回の便りはこのことについて報告するつもりではないので、ここで止めるが、この度の報道の中身で、メキシコが抱えている問題といおうか、現実を象徴する事項があった。



世界の富豪ランキングに、メキシコの「麻薬カルテル首領」が含まれていることが分かり、大統領を始め、司法当局などメキシコ政府が反発している。彼の推定資産額は約10億ドル(約980億円)で、701位だった。

地元紙ユニベルサルは、「(麻薬ビジネスは)世界金融危機でも影響がなかった」と皮肉ったが、各種の記事を総合すると、この首領は最大組織の一つ、シナロア・カルテルのボスとされ、米国への最大のコカイン供給元とされる同カルテルを永年指揮し、殺人容疑などで1993年に逮捕されたが、2001年に清掃車内に紛れ込んで脱獄し、以後高額の賞金付きで指名手配されている。

輸出国であるコロンビアと、消費地であるアメリカの重要な中継地点であるメキシコは、多くのコカインがこの国を通過するので、カルテル間の麻薬商売の競争も激しく、利益も大きい。

カルデロン大統領は、就任以来麻薬撲滅に積極的に取り組んでおり、米国国境沿いの北部を中心に、麻薬組織同士の抗争や、組織と政府軍の交戦が激化、昨年からの死者数は累計で約七千人に上っており、一部の報道では、「内戦状態」とまで言っている。メキシコでの麻薬戦争の帰結はどうなるだろうか。

ここまで書いてきてふと考えが沸き起こった。一流経済誌なので掲載の根拠は正しいだろうとすると、このような不正取引で得たであろう金額で、しかも行方不明といわれている人の額を、推定額とはいえどのように算定したのだろうか。掲載の良し悪しとともに、疑問が頭を過ぎる。

これらの報道後、公共交通機関でたまたま隣に乗り合わせた、身なりのきちんとした紳士が、「シナロア」のロゴ入りの立派な皮のカバンを膝に抱えていた。彼は、上記のグループに関係が有るだろうかと、好奇心を注がれて、挙動を感じられないように、時々横目で「チラリ、チラリ」と眺めたが、周囲の乗客と余りにも異質な立派な服装と、カバンのロゴが、心の内なる妄想をかきたてた。時が時だけに気になる瞬間であった。

今回のタイトルに採用した、次の諺がある。

「**Bienes mal adquiridos, a nadie han enriquecido**」(ビエネス マル アドゥキリードス ア ナディエ アン エンリケシード と発音し、直訳は悪い手段で手に入れた財産は、何人も富ませたことが無いというもので、日本語の諺としては、サブタイトルに記したようなものだろう)

諺の多くは示唆に富、蘊蓄のあるものだし、多くの事実はそのような帰結になっているだろうが、歴史を振り返ってみても、時には諺どおりにはならないものがあるのも確かである。

日本でも、時おりにわか成金をマスコミがこぞって褒め称え、あとはお決まりの不快なニュースに到ることが多々あるが、タイトルが意図しているように、どこの国においても、まじめに働いている者が、正当な利益を得て当然の世の中になって欲しいものだ

富の偏在と麻薬問題、メキシコが抱える大きな社会問題も、日本だって、「対岸の火事」的に見ていられる問題ではない。重いテーマを話題に取り上げてしまったせいで、またテキーラを飲んでしまった。

今回は、「チビリ、チビリ」ではなく、冒頭に書いた約束どおり、「チビリ」とだけテキーラを飲んで取りやめた。その「チビリ」の量の問題だが、言わぬが花というものだ。

(2009年3月21日)